

---

watch!

夏川優希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

watch!

### 【Nコード】

N5871Z

### 【作者名】

夏川優希

### 【あらすじ】

妹に彼氏が出来た！

俺はものすごくあせる。いや、シスコンとかじゃなくて。

純粹に心配なんだ、妹の彼氏の命が。

## 1話 発表

「お兄ちゃん！私、彼氏できたんだ。」

妹は紅茶の入ったカップ片手に笑顔で俺に残酷な言葉を発した。

俺は血の気が引いていくのを感じた。

「そ……それ……じ、冗談だよな……？」

俺は食べかけのビスケット片手に、無理やり笑って見せた。引きつっているのが自分でも分かる。

「今日はエイプリルフルじゃないよ、お兄ちゃん！」

笑ってる。でも俺の笑いとは正反対のまばゆいばかりの笑顔だ。

「い、いや……そういう事じゃなくて……。」

「もう！シスコンも大概にしてよね！」

怒らせてしまったようだ。妹は座っていたソファから勢い良く立ち上がると、ポニーテールを揺らしながらリビングから飛び出しているってしまった。

妹の飲みかけの紅茶だけが残った。

「本当に……そういう事じゃないんだよ……。」

持っていたビスケットが手をすり抜け床に落ちてゆく。

砕けたビスケットを眺めながら途方にくれた。

そう、俺はシスコンじゃない……と思う。

純粹に心配なのだ。

妹の方じゃない。妹の彼氏の命が。

## 1話 発表（後書き）

初めて書いた小説ですので拙いところが多々あると思います。  
厳しい批判や、誤字脱字など何かありましたら是非ご指摘下さい。  
感想等もいただけると嬉しいですよ。

## 2話 懇願

「おい、頼むよ田中！お前人脈広いしさ」

俺は頭を深々と下げたお願いでいる。なのに田中は一向に首を縦に振らない！

そして田中は俺に目もくれずに鏡を見ながら前髪のV字バンクを整えながら言う。

「嫌だ。何で俺がお前のシスコンに付き合わなきゃいけないわけ？」

田中は『面倒くさいです。お帰り下さい。』といわんばかりの顔をしている。

「シスコンとかじゃないんだって本当に！これは人の命を守るためであってだな」

田中は即座に反論してくる。

「なんで妹の彼氏を探るのが人命の話になるんだよ。」

「そ……それはだな、色々と事情が……」

田中はさげすんだような目で俺を見た。周りの人間の視線も痛い……。

「とにかく、これ以上凜ちゃんに干渉しないでやれよ。俺は凜ちゃんの味方だからお前に協力はできない！」

俺はトボトボと屋上に向かった。屋上に行くまでの暗く、じめじめした廊下の空気が俺の「がっかり感」をさらにあおってくる。

「おお！圭介、どうだった？」

見覚えのある癖毛の友人を発見すると、俺は少し安心して顔がほころんだ。さらなる安心を求め、友人の下へ走った。

「全滅。凜のヤツ田中にも根回ししてた。」

俺はフェンスにもたれ掛かって伸びをした。そしておもむろに双眼鏡をカバンから取り出し、凜のいる教室の方を見る。カーテンが閉まっているため、凜の姿は見えなかった。

海斗はごろんと横になって笑った。

「ハハハ。やっぱりか。凜ちゃん相変わらず抜け目ないねえ。」

俺は凜の正体を知っている数少ないこの幼馴染にも情報収集を手伝ってもらっていたのだ。

「海斗の方もダメだった？」

海斗は困ったように頭をかいた。

「うん。色んな人にあたってみたけど、みんな『知らない』か『教えない』のどっちかであらう。」

俺達は2人揃ってため息をついた。

「そうか……。弱ったな。どうしたもんか。みんな俺をシスコン認定するしさ。」

俺はフェンスにもたれ掛かったままズルズルと足を滑らせて最終的に座り込んだ。

空が青い。汗で湿ったシャツに風があたって涼しい。

心地よさで俺はほぼ元気を取り戻した。

「それは仕方ないよ。圭介、普段から凜ちゃんのこと監視しすぎなんだもん。昼休みに双眼鏡で妹の教室のぞく兄貴なんか普通いねえよ。」

海斗は困ったように笑う。

「だって中学の時あんなことがあったんだぜ？もう心配で心配で。あのときのことを思い出して、俺は鳥肌が立つのを感じた。」

「気持ち分かるけどね。とりあえず弁当食おうぜ！聞き込みに走り回ったから腹減った。」

俺達はその言葉を合図に弁当を広げた。

「このままじゃ中学の時の惨劇が繰り返されてしまう。なんとか凛の彼氏とコンタクトを取らなくてはいけない。」  
俺は卵焼きを口にほお張りながら力強く演説する。

「まあ、それには賛成。彼氏が誰なのかわからないと対策の仕様が無いからね。それに、あの惨劇は出来ればもう見たくない。」  
海斗はパンをかじりながら苦笑いした。

「でも、向こうも色々策を巡らせている様だ。人に聞いてもムダなら自分達の足で探すしかないよ。」  
海斗はニヤツと笑う。

俺もニヤツと笑った。

「よし、尾行するか！」

### 3話 尾行

「……尾行ってなんだかワクワクするな。」

俺は小声で、しかし興奮気味に呟いた。

「ああ、小学生の頃2人で巨乳のお姉さんの後をつけて家突き止めたこと思い出すな。」

海斗もニヤニヤしながら小声で話す。その声はテンションの高さを物語った。

俺達は凜から30メートルほど離れたところから凜の様子を伺う。

「しかし、本当に凜ちゃん彼氏と会うのか？」

海斗はちよつと顔をしかめた。

「凜が彼氏と会わない日なんて存在しないさ。中学の時だって毎日毎日毎日毎日彼氏に会いに行ってたんだぜ？彼氏が友達と遊びに行く時だって無理矢理付いていったし、どうしても会えない日でも彼氏の家にはりついて監視したりさ……」

俺はまるで怪談話でもするような言い方をした。この恐怖を海斗にも分かってもらおうとしたのだ。

「え？そんな事までしてたのか。恐ろしいな。」

海斗は恐怖を感じ取ってくれたようだ。俺は満足して少し得意げに笑った。

「ああ。まさに恐怖だっただろうな。あ！道曲がる。追っぞ！」

俺達は見失わないように走った。

角を勢い良く飛び出すと何かがみぞおちに当り俺はそのまま倒れこんでしまった。

俺はしばらく何が起きたのか分からず地面に突っ伏していた。

下からうめき声が聞こえる。

あれ？ 転んだ割にはどこも痛くないな……

「おい、圭介！ はやく起きてやれ、窒息しちまうだろ！」

海斗の言葉でようやく「みぞおちに当たった何か」と「俺の下でうめいている何か」が人だという事に気付いた。

俺は急いで立ち上がった。

「わっ！ ごめんごめん、大丈夫ですか？」

俺の下にいたのはふんわりしたボブヘアの小柄な女の子だった。あんなに派手にぶつかったのに、女の子に大きな怪我はないようだ。女の子が背負っていた身長に不釣り合いな大きなリュックがクツションとなり、頭や背中を守ってくれたらしい。

ぶつかった相手に手を差し伸べる。あれ？ 同じ学校の制服だ。それに、この顔どっかで……？

「わあ、飯島さんじゃないか。どうしたのさ、こんなところで？」

海斗がいち早くこの女の子の正体に気が付いた。

ああそうだ、思い出した。隣のクラスの飯島さんだ。あんまり話したこと無かったから気が付かなかった。

飯島さんはためらいがちに俺の手を取って立ち上がった。

「いや、ちよつと散歩に…… 岡田君と松島君こそ。そんなに急いでどうしたの？」

飯島さんは服についた砂を払いながらギリギリ聞き取れるくらいの小さい声で話す。

俺達は顔を見合わせた。

最初に海斗が口を開く。

「いや、ちよつと最近体力落ちてたから走り込みをね！」

その言い訳はちよつと苦しくないか？ でもここは合わせるしか……

「そ、そうそう！ ついでにどっちが速いか競争しててさ。それでぶつかっちゃったんだ。ごめんね！」

「そつだ、怪我とかない？大丈夫だった？結構派手に転んでたからさ。」

海斗が話をすりかえた！良くやった海斗！

「うん、とりあえず大丈夫そう。それじゃあまた明日ね。走りこみ、頑張つて。」

飯島さんは足早に去っていく。

ああ、妹の姿はどこにも見当たらない。

「ダメだったな。」

俺はため息混じりに呟いた。

「まあ凜ちゃんの事だ。そんなに簡単に探し出せるわけ無いだろ。気長にやろうぜ。」

しかし、そんなに悠長にしている時間はないようだ……。

凜の行動がおかしくなっているような気がする。

携帯をいじる頻度も増えてきたようだ。

凜は彼氏からメールの返事が来なくなると、心配になってそれまでの2倍のメールを送りつけてしまつらしい。1通返事しないことに2倍。考えただけで恐ろしい。

まあメールの返信をちゃんとすれば問題ないのだが……つい、忘れてしまうこともあるだろう。

中学の時は最終的に3分に1回程度メールを送りつけていたそうだ。

彼氏には悪いが、凜の体力と執念に感心してしまった。

最近、部屋にこもってばかりだし……心配だ。

何をやっているのだろう……。

#### 4話 暗闇

「おい、凜？ご飯できたから呼んで来いって母さんが……。」  
凜は電気もつけずにパソコンの画面を見つめている。

「今日はご飯いいわ。」

凜は無機質なパソコンの光に照らされて怪しげな雰囲気を帯びている。

「ご飯いって……外で食べてきたのか？」

俺は凜の部屋に足を踏み入れる。するとようやく凜の部屋がいつもと違うことに気が付いた。

「おい……なんでこんなたくさんゴミがあるんだよ？」

凜の部屋の片隅にゴミ袋が5つもあった。凜はゴミを溜め込むタイプではない。俺は血の気が引いていくのを感じた。

「お兄ちゃんには……関係のないことよ……。触らないで！」

俺は伸ばしかけた手を引っ込めた。凜は凄く怖い顔をしている。俺が手を引っ込めたのを確認すると、凜は視線をパソコンの画面に移した。

「大丈夫よ……。ちゃんと仕分けたら自分でゴミ置き場に捨てておくから。」

俺は凜の部屋の異質な空気に耐えられなくなり、出て行くことにした。これ以上ここにいるのも何も得しない。

俺は去り際にパソコンの画面をチラリと見た。凜はグーグルアースでいろいろな角度から誰かの家を見ている。俺の知らない家だが……

……まさか、彼氏の家か？

「ああ、そうだお兄ちゃん。シスコンも大概にしてって私言ったよね？」

俺は足を止めて振り返る。冷や汗が止まらない。

「な、何のこと？別に俺にも……。」

凜がこちらをにらみつける。

「とぼけないでよ！次私を尾行したら許さないから！」  
あまりにも大きな声を出したので俺は驚いて声が出なくなった。  
「もう用が済んだら出て行って。早く！」  
俺は急いで凜の部屋のドアを閉め、走って凜の部屋から遠ざかった。  
尾行は大失敗だったようだ。凜を怒らせてしまった。  
それにしても……あの大量のゴミ、あれはきつと彼氏の家の……。  
俺は恐くなって考えるのをやめた。

## 5話 焦燥

「海斗！俺はどうしたら良いんだああああ」

この秋晴れの空の下、圭介だけが嵐に遭ったように取り乱している。大方、彼氏の事無理矢理聞きだそうとして「お兄ちゃんなんか嫌い！」とか言われたんだろう。

「なんだよ。また凜ちゃんか？」

「そうなんだよ！尾行がバレちゃって、昨日から口きいてくれないんだよおおお！しかも、しつこく話しかけたらフライパンで頭殴られたんだよ！見てコレ！酷いと思わない？」

圭介が髪を掻き分けて頭を俺に突きつける。よく見ると確かにたんこぶが出来ていた。派手にやったなあ。

圭介は今にも泣き出しそうだ。たんこぶが痛いからというよりは凜ちゃんに口きいてもらえないのが辛いのだろう。いつつも否定するけどこいつってやっぱりシスコンだな。

「後つけてたのバレてたのか……。」

圭介は相変わらず慌てている。

「海斗、どうしよう！凜が携帯をいじる頻度も増えてきたし、昨日部屋に彼氏の家のゴミがあるの発見しちゃったんだ！ゲーグルアースで彼氏の家見てたし、このままじゃマジで彼氏の事殺すかもしれないええ！」

圭介が涙目になってきた。本当にヘタレだなあ……。

「いやあ。まだ大丈夫だって、ちよつと落ち着け。」

取り乱す圭介をなだめながらドアの方を見やると、飯島さんが俺らの教室に入ってきた。

飯島さんは凄い剣幕でまっすぐこちらへ来る。昨日ぶつかったこと

怒ってるのか……？

彼女は俺達の前で止まると一瞬立ちすくんだが、意を決したように昨日の10倍以上の大きな声で話しかけてきた。

「け、圭介君！話したいことがあります！放課後、屋上に来てください！」

それだけ言うとポカンとしている俺と圭介を置いて走って行ってしまった。

「な……なんだったんだ……」

圭介はまだ何が起こったのか分からないようだ。さっきまで飯島さんが立っていた空間を見つめながら呟いた。

「飯島さん、この前のことで怒ってんのかなあ……」

圭介はさっきよりもさらに落ち込んでいる。

「いいや、違うね。」

俺はニヤツと笑った。

あの発汗、顔の赤さ、声の大きさ、苗字呼びからいきなりの名前呼び、そして髪セットの丁寧さ……

俺は落ち込む圭介を横目に呟いた。

「おもしろくなりそうだ！」

## 6話 杞憂

放課後、俺達は言われたとおり屋上へ向かっていた。

「怖いなあ。怒られないかなあ。」

俺は心底ビクビクしていた。

あんなに顔真っ赤にして「屋上へ来い」って……

怒ってるに決まってる！

なのに海斗はなんだか機嫌が良かった。鼻歌まで歌っている。

「なあ、もし怒られたら海斗も一緒に謝ってくれよ？ジューズおごるからさあ。」

海斗は俺の顔を見るとニヤツとした。

「お前って本当鈍感だよな？」

……訳が分からない。

「はあ？なんで今鈍感の話が出てくるんだよ？」

屋上へのドアを開けて周りを見回すと、飯島さんが柵に寄りかかって空を見ていた。

俺達が来たことに気づくと慌てて柵から背中を離して髪をささつと整えるところらへ向かって歩いてきた。

飯島さんは俺を見て微笑んだ。

「来てくれてありがとう。」

そして海斗を一瞥すると低い声でボソツと呟いた。

「……岡田君も来たんだ。」

「ああ、邪魔ならどっか行くけど。圭介がどうしても一緒に来てくれって言うからさ。」

海斗はニヤニヤを一生懸命我慢しているように見える。なんでこの状況で笑ってられるんだよ……。

「それで、話って何？」

海斗がさっそく話を進めてしまった！

ちよつと展開が速すぎるよ、心の準備がまだ……

「圭介君！昨日、凜ちゃんの後つけてたんでしょ！？」

俺も海斗も想定外の言葉にただ呆然とした。

俺は急いでそれを否定した。これ以上シスコン認定されるのはまっぴらだ！

「ち、違うよ？走り込みを……」

「ごまかさないで大丈夫だから！私、圭介君の味方よ！」

飯島さんは1歩こちらへ歩み寄ってきた。俺はちよつと怖くなって一歩後ずさる。

すると見かねた海斗が間に割って入ってくれた。

そして俺が言いたかった言葉を海斗が代わりに話す。

「どういうことかな？何か知っているの？」

飯島さんにはにっこり笑った。……怖い。

「ええ。ゼーんぶ知ってるわ！中学の事件も、そして今現在の彼氏もね。」

昨日や今日の休み時間とは全く違うハキハキとした飯島さんに戸惑った。

飯島さんつてもっと大人しくて、控えめな子だと思っていたんだけど……。どうやら、そんな感じじゃないようだ。

俺があっけに取られているのを尻目に海斗が問いたです。

「なんで中学の事を知っているのかはとりあえず置いておこう。そ

れで、今の彼氏って誰なの？」

「……今から私についてきてくれる？」

## 7話 足音

ただの告白だと思ったのに、なんでこんな事になってんだよ。

赤々と色づいた紅葉が風に揺れている。

そして、圭介は飯島と並んで歩きながらクレープを食べてる。周り  
はカップルだらけだ。

俺は2人の後ろを1歩ほど間隔を空けてついていく。

……どう考えても俺だけ浮いてるよなあ。

飯島は凜ちゃんと凜ちゃんの彼氏がいそうな場所を巡っていると  
言っているが……圭介とデートしたいだけじゃん。

俺は後ろから嬉しそうに笑っている飯島を観察しながら色々と思考  
をめぐらせていた。

「屋上に呼び出したのは告白の為」という予想は外れたが、「圭介  
のことが好き」というのは間違っていないかったようだ。まあ、良く  
考えればほとんど面識も無いのに告白するというのは不自然だな。

それにしても、凜ちゃんの彼氏を知っているというのは本当だろう  
か？デートのための嘘……にしてはやりすぎだし、「中学の事件」  
を知っているのはごく限られた人物だけだ。きっと彼氏を知ってい  
るというのは本当なのだろう。

では、何故こいつが凜ちゃんの彼氏を知っている？友人伝いに聞い  
たのだろうか。

飯島はけして社交的な性格とは言いがたい。どちらかというとな人  
しい、目立たない子だ。普段は。

だから屋上で饒舌に話し出したことや、今、圭介に積極的にアプロ  
ーチしているのに驚いている。

これも「愛」の力だというのか？

凜ちゃんを見てきた俺としては、「愛」の力を否定は出来ない。

「おい、海斗？海斗？」

圭介の呼ぶ声で俺はハッと我に帰った。飯島がいない。

「飯島さんは？」

圭介は驚いた顔をして答える。

「トイレ行ってくるって言ってたじゃん。どうしたんだよボーっとして。」

俺はため息をついた。圭介……何も考えずにバカ正直に飯島のデートに付き合ってたのかよ。まあ圭介らしいけどな。

「色々考えてたんだよ。なんで飯島さんが凜ちゃんの彼氏知ってるのかとか。」

圭介はアホ面で手をたたく。

「あー！全然考えてなかった！そういえば、何で凜の彼氏の事してんのかな？」

……こいつ、やっぱりアホだ！俺はさらに大きなため息をつけてイライラをおさめようと努力した。

「まあ、このしょうもないデートに付き合ってるりゃ最終的には答えに辿り着くんだろうさ。そうじゃなかったらとんだ時間の無駄だけどな。」

すると背後から足音が聞こえた。飯島が帰ってきたか。

飯島の顔なんか別に見たくも無かったので俺は圭介がどんな顔をすめるのか気になり、圭介のほうを見た。

ニヤニヤしながら手を振っていたら足を踏んづけてやろうと思ったが、圭介はニヤニヤするどころか驚愕を顔に浮かべて直立不動のまま凍りついていた。それを見て何か異常事態が起こったとようやく気が付いた俺は後ろを振り返り飯島のほうを見る。

飯島の隣にいたのは……知らない男と手をつないだ凜ちゃんだった。

## 8話 彼氏

強い風が吹き、紅葉が舞う中、飯島さんと凜、そして見知らぬ男が並んで歩み寄ってくる。俺は一生懸命求めて、あれこれ詮索していた物が突如として目の前に現れたことに驚き、固まった。海斗の方を見ると同じように固まっていた。

飯島さんは無邪気に笑いながら手を振る。

「圭介君！連れてきたよ。」

凜は恥ずかしそうな顔をしてうつむいている。……手、つないでるし。

凜と手をつないでいる「彼氏」と思われる男は俺に向かってお辞儀をした。凜は、はにかみながらこの男の紹介を始めた。

「お兄ちゃん、こちらが私の彼氏の飯島悠斗君よ。」

彼氏？このくらそーなヤツが？俺の苛立ちに比例するように風が強くなっていく。その風に乗って凜の頭についた紅葉をあのお男が取った。そして凜はまた嬉しそうに微笑んだ。ますます腹が立つ。

凜の「彼氏」は、背は俺より高いが薄っぺらい感じでなんだか弱そうだ。とても凜の暴走を止められるとは思えない。

俺が嫌味の1つでもかましてやろうと思ったその時、凜の一言で何を言おうとしたのか忘れてしまった。

「もう！お姉さんの頼みじゃなかったら絶対紹介なんかしなかったのに。お兄ちゃん、悠斗に変なこと言わないでよ？」

ん？お姉さんなんてどこにいるんだ？あれ？飯島って……

俺は訳が分からなくなかって凜の彼氏を凝視した。

飯島さんは風で乱れた髪を手ぐしでセットしながら微笑んだ。

「悠斗はね、私の弟なのよ。姉弟共々仲良くしてね。」

## 9話 姉弟

「え……？弟？」

圭介が呟く。口をポカンと空けて何がなんだか分からないといった風だった。

俺もいささか驚いたが、聞いてみれば簡単なことだ。そりゃ、姉ならば弟の彼女を把握していてもおかしくは無い。そしてシスコン圭介が凜ちゃんの彼氏を探しているという事を聞き、うまく利用して圭介とお近づきになるうと策をめぐらしたという所だろう。

俺はくだらないデートに付き合わされた事に少し腹を立てていたので嫌味を言っただけだった。

「弟さんだったんですかぁ。だったらこんなに時間かけて探さなくても携帯で電話したらよかったですんじやないですか？」

「携帯の充電無くて。それに、時間かけた方が驚きも増すでしょう？サプライズしたかったの。」

飯島は余裕の笑みで答える。俺は「嘘つくなクソ女！」と口から飛び出そうになるのを押さえながら微笑み返してやった。

圭介はアホ面で凜ちゃんの彼氏と喋ってる。

「あんまり似てないですね。身長差すごい……」

飯島は圭介が自分（と弟）に興味を持ったように弟を押しつけるのけ、横から嬉しそうに答えた。

「うん、よく言われる。私は母似で悠斗は父似なの。」

そんな家族紹介いらねえよ。

俺は凜ちゃんとその彼氏が2人でイチャイチャ喋っている時を見計らって圭介をグイツと引き寄せ、耳元に小声で話しかけた。

「おい、凜ちゃんの彼氏に警告しなくていいのかよ？」

圭介は思い出したように小さく手をたたいた。

「そうだった。でも凜がいたら話せないよ。変なこと言わないでっ怒られる。」

それはそうだ。じゃあどうするか……。

「私に言ってくれれば私から悠斗に伝えるけど？ここだと凜ちゃんに聞こえちゃうし、いったん2人と別れて別のところで話しましょ。」

飯島がひそひそ話に乱入してきやがった。しかもまだデートを続ける気か！

「ああ、良い案だね。じゃあお願いしようかな。」

圭介が承諾しやがった！しかし、俺にも良い案が浮かんだわけではなかった。素直に従わざる他ない。もう1人で帰ってやるうかとも思ったが、ただでさえアホな圭介がこの狡猾な女に何か悪いことをされるんじゃないかと心配で帰るに帰れない。それにしても、最初からこいつらが姉弟だつて気付いてたらこんなデートしなくてもサラッと警告を伝えてもらえたのに……。

結局近くのドトールに入り、3人でテーブルを囲むこととなった。

飯島がいらんてくる。帰れといわんばかりだ。しかし俺は無視して涼しげにコーヒーを飲んでやった。コーヒーを飲めない圭介は何も知らずにのん気にココア飲んでやがる。

しばらくその状態が続いたが、ココアを半分ほど飲んだところで圭介が沈黙を破った。

「飯島さん、悠斗君に伝えたいことなんだけど……。」

飯島は圭介に話しかけられたのが嬉しかったのかニツコリ笑った。

「何かな？それから、悠斗も私も飯島だからややこしいじゃない？私の事は香織って呼んで。」

うわっ！弟を利用して名前呼びを勧めてきやがった！本当にずうずうしい女だ。それに気付かず、アホ圭介はなんのためらいもなくうなずいた。

「じゃあ香織ちゃん、悠斗君に伝えて欲しいんだ。凜は危険だつて。少しでも他の女の子と話せばもの凄く嫉妬してその女の子に嫌がらせするし、メールの返信が遅れるとメールの量が2倍になるし、凜

とのデートを断ったりしたらその日1日中監視してくるし。中学の時なんか、凜が付き合ってた彼氏が他の女の子と遊びに行ったのがバレて、金づちで彼氏を殴り殺そうとしたんだ。俺が凜を止めたら男は肩と腕に打撲を負っただけですんだんだけど、凜は本気で殺そうとしてた。頭を確実に狙ってたから。俺が土下座して謝って、凜と別れさせるって約束したから警察沙汰にはならなかったけど本当に凜は危険なんだよ。」

圭介が珍しく真面目に話しているのに飯島はまだ夢心地といったようだった。よほど名前で呼ばれたのが嬉しかったようだ。ムカツクから俺も名前で呼んでやるぜ。

「香織はさ、弟が危険にさらされているのに冷静だね。今の話結構ショッキングな内容だと思っただけど？」

飯島……いや、香織は俺にまで名前呼びされたことに驚き、そして次第に不機嫌そうな顔になった。お前がややこしいから名前で呼べっていったんだろが！

「だから、最初に言ったじゃない。私は全部知っているって。今の話も全部凜ちゃんに聞いたわ。」

圭介は驚いて飲んでいたココアを吐き出しそうになった。むせながらも、涙目で香織に問う。

「し、知ってるのに、別れさせようとか思わなかったの？」

飯島は圭介のほうを向いて微笑む。本当に表情のこころ変わる女だ。

「思わなかったわ。だって彼女がいながら他の女と会う男が悪いのよ。凜ちゃんの気持ち、すごく良く分かる。」

この言葉には流石の圭介も少し引いたようだった。恐らく、圭介も俺と同じことを思ってるだろう。

こいつは危険だ。凜ちゃんタイプだ！

## 10話 曇天

屋上を冷たい風が通り抜ける。だいぶ校庭の木々の葉が落ちていて冬の気配を感じさせる景色になってきた。そろそろ屋上で飯食うのも辛くなってきたな……。

「なあ圭介。凜ちゃんなんて言ってた？」

海斗がいつもの焼きそばパンをかじりながら問いかけてきた。

「あー。なんかうまくいつてるみたい。メールもちゃんと返してくれるってさ。携帯ばかりいじってたのも、メールしてたんじゃないんだって。」

俺は食い終わった空の弁当箱をサツと片付けながら答えた。

鉛のような重たい曇天の空を見上げると頬に何か冷たいものが当たる。

「あちゃー。雨降ってきたやがった。中入ろうぜ。」

海斗は食べかけの焼きそばパンをかばうようにして走り、校舎の中へ入っていく。俺も後を追って校舎めがけて走った。一瞬、誰かの視線を感じたような気がして周りを見回したが誰もいない。俺は気のせいだと思いそのまま校舎の中へ入っていった。

海斗は3分の1ほど残っていた焼きそばパンを口に押し込むと強くなってきた雨を横目に見ながら屋上の前の人気の無い廊下に座り込んだ。それを見て俺も隣に座り込む。焼きそばパンを飲み込んだ海斗がため息をついた。

「今日の天気予報で雨降らないって言ってたから俺傘持ってきてねえよ。お前傘2本持ってない？」

俺はロッカーに折り畳み傘がある事と、今朝母さんに無理矢理傘を持たされたことを思い出した。

「ああ、あるある。1本折り畳みあるから貸してやるよ。」  
海斗は目を輝かせた。

「おお！サンキューな！良かった良かった。風邪引くかと思っただぜ。」  
そんな話をしていると遠くから誰かがこちらへ向かってくるのが見えた。

「あれ？香織ちゃんかな？こんなところでどうしたんだろ？」

海斗は露骨にいやそうな顔をした。どうやら香織ちゃんの事あんまり好きじゃないみたいだ。

「あ、圭介くんやつぱりここだったんだ。」

香織ちゃんが手を振りながら小走りにこちらへ向かってくる。

「どうしたの？何か用？」

俺が問いかけると香織ちゃんが微笑む。

「今日ね、凜ちゃんがうちへ来て夕食と一緒に食べることになったの。だから圭介くんもこない？今日はお母さんもお父さんも仕事で帰りが遅くなるんでしよう？」

ううむ。確かに今日、凜が夕飯を作ってくれなかったら俺は何も食べられないまま寝ることになる。コンビニ弁当という手もあるがやはり温かい手料理が食べたい。凜と彼氏の動向も探りたいし、ここはお言葉に甘えよう。あれ？そういえば前にもこんな事が……

「うん。行くよ！是非行かせて下さい。あと、出来れば海斗も連れて行きたいんだけど……」

これには海斗も香織ちゃんも驚いたようだ。最初に海斗が口を開いた。

「別に俺は良いけど……。なんで俺もいくんだよ？」

俺は周りを見回して俺らのほかに誰もいないことを確認すると小声で話し始めた。

「中学の時さ、凜が彼氏の家に遊びに行ったことがあったんだ。その時、彼氏の部屋で凜がエロ本発見しちゃってさ。怒り狂って彼氏の首絞めて気絶させた事があったらしいんだよ。だから、もし凜が暴走したら海斗も一緒に止めて欲しいんだ。海斗は俺より力強いし、何かあったとき頼りになるからさ。」

俺は手を合わせて海斗に懇願した。

「頼む！ついてきてくれ。飯島さん、良いよね？」

飯島さんは嫌そうな顔をしていたが俺は気付かないふりをした。飯島さんには悪いが、もし凜が暴走したら俺では太刀打ちできない！飯島さんは俺の必死さを分かってくれたのか、弱弱しく笑うと小さく頷いてくれた。

そして飯島さんが頷くのを確認すると海斗も困惑気味に小さく頷いた。

「じゃあ決まりだ！飯島さん、海斗よろしく頼むね！」

俺は2人との温度差をうすうす感じながらも1人はしゃいだ。

## 11話 雷雨

海斗、俺、香織ちゃんが並んで座り、向かいに凜と悠斗君が2人仲良さげに座っていた。

香織ちゃんがつこり笑いながらなんだかよく分からない黒いものを差し出す。

「ほとんど凜ちゃんが作ってくれたんだけど、このしょうが焼きは私が作ったのよ！」

……しょうが焼き？この黒いのが？

香織ちゃんをチラツツと見ると微笑みながらこちらを見ている。食べ、という事らしい……。

助けを求めて海斗を見ると俺と目をあわさない様にしながらも、必死に笑いをこらえていた。俺を助ける気はさらさらないらしい。

俺は意を決して箸で「自称しょうが焼き」をつまむ。……肉をつまんだ時の手ごたえではない。

見た目も手ごたえも完全に木炭だ。しかし、微笑んでいる香織ちゃんを裏切るわけには……。

俺は目をつぶってえいと口に放り込んだ。

ま、まずいいいいいいいい！！

もちろん美味しいわけがない。知ってたし、覚悟してたけど想像以上だ……。

焼きすぎで肉は炭と化しているし、砂糖を入れすぎて味がおかしくなっている。

しかし、微笑んでこちらを見ている香織ちゃんの前で吐き出すわけには行かない。俺は必死に飲み込み、笑って見せた。海斗が笑いを

こらえるのに必死で顔が真っ赤になっている。2口目をすすめられる前に話題を変えなきゃ……

「ね、ねえ！凜と悠斗君、どっちから告白したの？2人の馴れ初め、聞きたいなって！」

凜ははにかみながらも答えてくれた。

「ええとね、告白は私からだだったの。廊下で彼を見かけて一目惚れしちゃって。でも、1回目は振られちゃったの。それから猛アタックして、ようやくこの前OKもらえたのよ！」

嫌な予感がする。

「猛アタックって？」

俺は顔を引きつらせながらも笑顔を作るよう努力した。

「うーんと……これはアタックって訳じゃないんだけど、悠斗とたまたま趣味があってね、まあそれがきつかけかな。」

……「たまたま」ねえ。

絶対たまたまじゃないよ……ストーカーしたり、どっかから監視したり、ゴミ袋漁ったりしたんだろ……。下手したらどっかからこの家に侵入したりしたんじゃないのか？そいえば、この前熱心に携帯いじってたのも、悠斗君と話をあわせるために色々情報収集していたのだろうか？もう怖くてこれ以上聞けなかった。

そして俺らは食事を終え、片づけを手伝っていると2階から凜の悲鳴が聞こえた。俺達は急いで凜の声がする部屋へ向かった。

扉の向こうから凜のうめき声が聞こえてくる。

「僕の部屋だ……。まさか!？」

悠斗君が勢い良くドアを開け、中に飛び込む。俺もそれに続いた。

「なんだ？どうした凜！」

凜は震えながら振り返ると彼氏のほうへ少しずつ歩み寄ってくる。暗くて表情は読み取れない。



やめろおおおおお！！！！」

最後は悲痛な叫びになった。

凜がスタスタになった「抱き枕だった物」を彼氏の方へ投げる。そしてあの眩いばかりの笑顔を向けた。

「次はお前だ」

凜がハサミを手にゆっくりと歩み寄ってくる。彼氏は足がすくんでしまつて動けないようだ。ヤバイ、殺される！

「凜、やめ」

俺がけん制する前に何かが俺の横を風のように走り抜けていく。

海斗か！やっぱり呼んでおいてよかった、と思つたが良く見ると俺のすぐ隣には棒立ちの海斗がいる。じゃあアレは……

「いい加減にしなさい」

香織ちゃんだ！

香織ちゃんは素早く凜の前まで行く。凜のハサミを持った手をつかみそのまま背負い投げてしまった。凜は綺麗に弧を描き、ベッドに飛び込んでいく。

俺達は色々なことがいっぺんにおき、処理が追いつかずただ呆然としていた。凜ですら、どうして自分が宙を舞つたのか分からないという様子だった。

## 12話 余韻

昨日の雷雨が嘘だったように空には雲一つ無く、穏やかな風がほとんど葉の無くなった木々をかすかに揺らした。暖かな日差しが2人を照らす。海斗が神妙な顔で、おそろおそろ昨日の話題を持ちかけてきた。

「なあ、海斗。凜ちゃんなんて言ってた？」

俺はあくびをしながら昨日の凜の様子を思い出した。すると、あくびはため息に変わる。俺は心配になってきて、素早く双眼鏡を取り出すと凜の教室の方を見た。男子がバカ騒ぎしているだけで、凜の姿は見当たらない。双眼鏡を持ったまま海斗の質問に答えた。

「それがさあ、香織ちゃんに酷く叱られたのが凜が珍しくシユンとしちゃって。俺とほとんど話さないまま寝ちゃったんだよ。だから俺達が帰った後の事も、彼氏と仲直りできたのかも分からないんだ。」

「そう、あの後香織ちゃんに凜と悠斗君と3人で話がしたいって言われて、海斗と俺は帰されてしまった。そして、俺は昨日の香織ちゃんの見事な背負い投げを思い出した。」

「香織ちゃんって柔道とかやってたのかなあ。昨日のヤツ、すごかったよな。」

海斗も気になっていたようで、話に食いついてきた。

「ホント、あれは凄かった！あんな小さい体で、あの凜ちゃんの暴走を一瞬で止めたんだもん！」

俺も激しく頷く。いくら双眼鏡を見つめていても凜を見ることが出来ないのも俺は諦めて双眼鏡をしまい、海斗の方へ向き直った。

「本当だよな。俺ら2人がかりでも止めるのがやっとなのに。あんな小さい女の子がねえ……。」

海斗が思い出したように手をたたいて体勢を直した。

「そつだ、今日の放課後凜ちゃんの彼氏さんに会いにいかね？凜ち

やん図書委員で今日集まりあるから3人で話せるし。この学校の生徒なんだろ？」

俺は昨日の話を思い出した。

「そういえばそうだったな。でも何組かわかんねえぞ？」

「そんなの1年のやつらに聞けば分かるだろ！身元は割れてるんだからよ？」

海斗がまるで刑事みたいな話し方で答える。

そういえば、彼氏とはほとんど喋っていない。昨日も俺が話しかけても「はい」か「いいえ」以外の単語を発しなかった。まったく、無愛想なヤツだ。

「そうだな、行こうか！俺も1回ちゃんと彼氏と喋ってみたいし、昨日の事で色々聞きたいこともあるからさ。この機会を逃したら凜抜きで彼氏と話せるのいつになるかわかんねえし。」

海斗は笑顔で頷いた。

「じゃあ、放課後聞き込み開始だ！」

### 13話 幽霊

「なあ、クラス分かった？」

俺は息を切らしながら海斗にたずねる。

「いや、やっぱり皆知らないって。確かにあいつ、この学校の制服着てたよなあ？」

海斗も肩で息をしながら答えた。

さつきから俺らはずっと走り回っている。色々な1年生に「飯島悠斗はこのクラスか？」という質問を繰り返しているが誰も知らない、というより、飯島悠斗なんて名前聞いたことがないというのだ！俺達は狐につままれたような気持ちになった。

「悠斗君って幽霊だったりしてな」

海斗が笑う。冗談のつもりだと思うが、妙に真実味を帯びてきた。

俺達の横を通り過ぎて行った女の子を捕まえ、ゲシユタルト崩壊寸前の「飯島悠斗はこのクラスか？」という質問を投げかけた。

どうせまたダメだろうと思っていたが、意外なことに女の子はあっさり「8組です。」と答えた。俺達は女の子を二度見してしまった。

「な、なんで知ってるの!？」

俺と海斗が同時に言葉を発した。女の子は俺達があまりにも詰め寄ってくるので怯えてしまったようだ。青い顔で答えた。

「お、同じクラスだし、私の前の席が飯島君なので……。」  
なるほど、彼は幽霊ではなかったようだ！

「ありがとう！ものすごく助かった！」

彼女にお礼を言うと俺達は走り出した。急がないと凛の図書委員の集会が終わってしまう！

「なんだっ たんだろ……」

少女がため息をつく。

「ねえ、あなた？」

背後から急に声がして、驚いた少女が後ろを向くとまるで人形のよ  
うな女の子が立っていた。

陶器のような白い肌、毛先にゆるいウェーブがかかった長い髪、ガ  
ラス球のような瞳をしている。

「は、はい？ なんでしょ？」

緊張して声が裏返る。それくらい綺麗だったのだ。

「先ほどの方と何のお話をしてらしたの？」

声も透き通るように美しい。

「ええと、飯島悠斗君の教室はどこか、と……」

それを聞くと人形のような女の子は微笑んだ。

「そう、それならいいですね。どうもありがとうございます。」

そういうと足早に去って行ってしまった。

残された少女は呆然と立ち尽くす。

「本当に……なんだっ たんだろ……？」

## 14話 笑顔

8組の教室をこっそりとのぞく。……ヤツがいた！

「海斗、いたぞ！連行しろ！」

俺は声を張り上げる。海斗もノリノリだ。

「ハッ！飯島悠斗！署までご同行願います！」

悠斗君はもちろん、訳が分からずにオロオロしている。

「ホラッ！早く来い、証拠は拳がっているんだぞ！大人しくしろ！」

そういうと、2人で悠斗君の腕をつかみズルズルと引きずるようにして教室を出て、階段を上った。

「あの、コレは一体……？」

引きずられながら、悠斗君が抵抗もせずに関いかけてきた。俺達は  
まだ刑事ごっこを続ける。

「話は署で聞かせてもらう！」

海斗がニヤニヤしながら言い放った。

屋上の扉を開き、悠斗君を降ろした。悠斗君は痛そうに肩を回す。  
そして俺達と目をあわさないようにつつむきながらボソボソと喋り  
だした。

「ええと……何の用ですか？」

俺達はまだテンションが高めだった。

「おい！お前幽霊なのか！？」

海斗がニヤニヤしながら肩を揺すった。

「……は？」

悠斗君は何がなんだか分からないといった様子だ。俺が補足する。

「お前の事めっちゃ探したんだぞ！なのに誰もお前のこと知らないって言うんだよ！これは一体どういうことだ！？」

海斗と同じように肩を揺すりながら尋ねる。すると、急に悠斗君の声のトーンが下がった。通常状態の時でも声は低めでボソボソと喋るのに、さらに低くなるものだから聞き取るのに大変苦労した。

「僕…… コミュ障だから……。」

「ん？ コミュシヨーってなんだ？」

俺は海斗の方を向き、説明を求めた。

「簡単に言つと、他人とコミュニケーション取るのが苦手って事」

悠斗君はうなずく。

「他人と話すのが苦手で、友達いないんです……。だから、同じクラスの人でもまだ僕の事認識してない人もいるみたいで……。お手数おかけして申し訳ありません。」

一瞬沈黙が流れた。雰囲気が一気に暗くなる。さっきまで刑事ごっこしてたのが嘘のようだ。

「そ、そうか。まあそれは良いとして……。昨日！ どうだったの？」

悠斗君は依然として俺達と目を合わせようとしない。

「ええと…… 凜ちゃんはものすごく姉さんに怒られて、それから部屋の片付けをさせられて……。それから、話し合いをしました。」

「え？ なんの？」

海斗が尋ねる。

「あの…… フィギュアとかポスターの事なんですけど。…… 凜ちゃんは全部捨てろって言うんです。でも僕はそれが嫌で……。嫌だつて言ったら凜ちゃんが包丁取りに行こうとするし、それに姉さんがまたキレて投げ飛ばすしで結局進展はないままです。お兄さん達も一緒に説得してくださいよ！」

初めて悠斗君が俺と目をあわした。あの惨事の後でフィギュア捨てるの嫌つて言えたのか……。なかなか度胸のあるヤツだな。

俺はニッコリ笑った。

「いやだ。」

悠斗君は崖から突き落とされたような顔になった。

「ど、どうしてですか!」

「俺は凜の味方だもん。それに、喧嘩の火種はないほうが君の為でもあるのだ。分かるか?」

俺は腕を組んでふんぞり返った。海斗が調子に乗った俺の頭をはたく。

「おい、可愛いそうさ。交渉してやろうぜ。それに、これ以上交渉を長引かせたほうが危険だろうが!」

俺は元の体勢に戻り、ニヤニヤを顔からにじませながら言った。

「冗談だよ! まあ、君は確かに凜にぴつたりりの男だ。このまま別れさせちゃうのも惜しいから、仕方ない。協力してやるよ。」  
悠斗君が不思議そうな顔をする。

「え?なんで僕が凜ちゃんにぴつたりなんです?どう見ても僕みたいなボツチ、学校のアイドルの凜ちゃんには不釣り合いなんじゃ……。」

「君はじつにバカだな!」

俺はドラえもんの声マネをしながらそう言い放った。悠斗君はビツクリしてる。

「凜の彼氏に友人が多いのはむしろマイナスなんだよ!特に女の子と彼氏が楽しげに話してるところなんか見たら大変なことになるし、友人との約束を優先してデートを頻繁に断るのもいただけない。だから、君みたいに友人0で、むしろ凜に依存するくらいの方がちょうどいいんだよ。」

俺はニツコリ笑った。しかし、悠斗君は微妙な顔をしている。

「まあ!協力してやるって言ってんだから素直に喜べ。な?」

俺は悠斗君の頭をポンポンとたたいた。悠斗君は俺に初めて笑顔を見せる。……初めての笑顔がフィギュアの事ってのもどうかと思うが……。

その時、いきなり校舎へと続くドアが勢い良く開いた。  
……凜だ！

## 15話 審判

「悠斗？ここにいたんだあ。探したんだよ？さあ帰りましょ。」  
凜が俺らには目もくれず、悠斗君に微笑みかける。

「ああ、俺らお邪魔かな？じゃあ悠斗君、また後日……」  
俺はそそくさと帰る支度を始めた。

「凜ちゃん！ちよつとここで話したいことがあるんだ！」

悠斗君が今まで見たこともない自信満々の表情で凜に宣戦布告する。  
俺は固まった。

「ね？お兄さん！」

悠斗君が俺らに微笑みかけた。

「おいおい……冗談じゃねえよ！まだ心の準備が……。」

「なあに？……もしかして、あのくだらないお人形さんたちの事かな？」

凜が微笑む。あわわわわ……スイッチが入りかけてるよ！

俺はあわてて悠斗君に耳打ちする。

「ゆ、悠斗君？凜に立ち向かうにはまずじっくりと作戦をだな？」

「くだらないなんて言わないで下さい！アレは僕の宝物なんです！  
見事に無視された。というか、こちらも変なスイッチが入ったよう  
だ。」

今ここで暴走状態になったらどうするんだよ！昨日みたいに背負い  
投げして場をおさめてくれる人はいないんだぞ？

俺はあせりと苛立ちでおかしくなりそうだった。見かねた海斗が俺  
にささやく。

「落ち着け、お前ならきつとレフリーになれる。さあ、可愛い妹と  
その彼氏の仲介役になってやれよ、お兄ちゃん！」

海斗の顔は、どう見ても笑いをこらえている。くっそ海斗のヤツ、  
人事だと思いやがって。なんかあったらお前も一緒に凜を押さえつ  
けてもらおうからな！

しかし、海斗の言うとおり俺が2人の仲介役をしないと埒が明かない。よし……。

俺は覚悟を決めた。そして高らかに宣言する。

「お前ら、そこに向かい合って座れ！俺が仲裁してやる。」

海斗がピューと口笛を吹き、「お兄ちゃんカツコイイ」と俺を茶化した。

## 16話 妥協

「なによ、お兄ちゃんには関係ないじゃない。これは2人の問題だわ。」

凜がブツブツと不平を言う。俺は凜に喝を入れた。

「俺はお前の兄だぞ！もし、悠斗君とお前が結婚したら悠斗君は俺の弟になるんだ。関係ないとは言わせないぞ！」

「け、結婚……」

凜が目を輝かせながら悠斗君と向かい合い、座った。よし、論点をずらすことに成功したぜ。

「じゃあ2人の言い分を聞かせてもらう、まずは凜。」

凜はまだ少し目を輝かせながら話し始める。

「ええと……ああ、人形の事だったわね。全部捨てて欲しいわ。だって私以外の女を見て欲しくないんだもの。」

相変わらずおかしな理由だ。人形にまで嫉妬するとは……。

「では、悠斗君、言い分を聞かせてくれ。」

俺は出来るだけ厳かに言った。緊張感を出すことにより、凜が暴走しにくい環境を作ろうと思ったのだ。……有効かどうかは分からないが。

悠斗君がためらいがちにボソボソと喋る。

「ええと……僕は捨てたくないです。別にフィギュアを捨てたからって凜の事をもっと好きになるって訳じゃないし……。僕の趣味を奪わないで欲しい。」

凜の目に光がなくなってきた。素早くそれを察知した海斗がフオローに入る。

「ええと……悠斗君はこれ以上ないくらい凜ちゃんの事が好きなんだよ？だからフィギュアがあったって別にいいじゃないか。そういう意味で悠斗君は今の発言をしたんだ。分かるよね？」

ナイスフオローだ海斗！俺は心の中で呟く。

しかし、凜は依然として不満そうな顔をしている。

「嫌なものは嫌なの！部屋である人形達が悠斗を見つめてるかと思うと……もう……」

凜が頭を抱えて下を向く。海斗が困惑の表情を浮かべながら凜の説得に当たった。

「凜ちゃん、あれは全部人形だよ？プラスチックとか、樹脂とかで作られている作り物だよ？動かないし、悠斗君を奪ったりもしない。洗濯ばさみが部屋に置いてあるのと同じなんだよ？」

凜は海斗の言葉に激しく反論した。

「だったら人間もそうだよ！ただの肉の塊、包丁で刺したり高いところから落とせば動かなくなる。でもそんな奴らでも海斗さんの大切なもの奪ったら嫌でしょう？」

「おい、凜！屁理屈言うなよ。論点がずれてるし、そういう問題じゃないだろ？海斗も困ってるし……」

「屁理屈なんかじゃないわ。私、間違ったこと言っていないもの。海斗さんが困ってるように私も困ってる。お互い様よ。」

ダメだ、話にならない。何か、何か妥協案は無いか……？

「なあ……凜？何か条件を出すのはどうだ？例えば、フィギュアを捨てないならブランドのバッグ買ってくれ！とかさ。じゃないとどっちも譲らないじゃん？」

俺はなるべく優しい話し方で提案した。凜は俺の言葉を聞くと、少し考えた後ゆっくりうなずいた。

「じゃあ……条件、ある。」

凜はさっきまでとは打って変わり、静かに答えた。悠斗君が身を乗り出して凜を見つめる。

「条件は？」

海斗が凜を促す。凜は真顔で悠斗君に言い放った。

「部屋に盗聴器つけさせてくれるなら考える。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5871z/>

---

watch!

2012年1月5日23時50分発行